

もくじ

大久保家資料の紹介⑤ 船津文測による絵馬 … P1 文化遺産を伝える史跡① 清亮寺 / 『國華』で足立区特集 … P3 お化け煙突 60年③ 発電所の役割 2 … P4

足立史談

第664号

2023年6月15日

足立区立郷土博物館内

足立史談編集局

〒120-0001

東京都足立区大谷田 5-20-1

TEL 03-3620-9393

FAX 03-5697-6562



図1 船津文測 絵馬「神馬図」板絵着色 天保12年(1841)当館蔵(大久保家資料)

大久保家資料の紹介⑤

江北の谷派絵師、船津文測による絵馬 郷土博物館

『足立史談』では第六六〇〜六六三号にかけて、千住四丁目で地漣紙問屋「紙屋」を営んだ大久保家が伝えた、千住宿や地漣紙問屋の活動にまつわる古文書資料を紹介してきました。大久保家の伝来資料には、それらの古文書と共に、同家の生活の中で用いられ、

一つとする鈴木其一ら江戸琳派の絵師たちと親交を深める他、書画や俳諧和歌、狂歌を嗜む千住の文人たちとも親しく交流し、安政六年に没するまで、豪農の主人と絵師の両輪で、千住・江北地域とその近隣で活動したことが明らかとなっています。

今日まで伝えられた美術資料も含まれています。今回はその一点、現在の足立区江北地域の豪農にして絵師、船津文測(ふなつぶんえん、一八〇六〜五六)が描いた絵馬「神馬図(しんめず)」をご紹介します。 ■江戸時代後期 足立の文人、船津文測 船津文測は、初名を久五郎といい、文政十三年(一八三〇)に測江領上沼田村(現・足立区江北地域)の豪農、船津家の家督を継承し、以降、地域の有力者として活動した人物です。また、家督継承以前より、絵師の谷文晁(たにぶんちやう、一七六三〜一八四一)に入門して画法を学び、文政九年(一八二六)には「文測」の雅号を授けられ、絵師としての活動も始めていました。 その後、文測は文晁の孫、二世谷文一(一八一四〜七七)をはじめとする谷派の絵師たちや、千住地域を活動舞台の

■大久保家伝来の絵馬「神馬図」 大久保家の伝来資料の一つとして確認されたのが、この船津文測の筆による絵馬「神馬図」(図1)です。 元は大久保家の屋敷稲荷に掲げられていた絵馬であり、縦四〇・五×幅六二・七センチの木板を下地として、朱色の鼻革を着けて繩に繋がれた堂々たる白馬が描かれ、左に「文測筆」の署名と「文淵畫印」の朱文方印が施されています。そして、絵馬の裏面には年紀銘と共に奉納者名が左のように墨書(図2)されています。

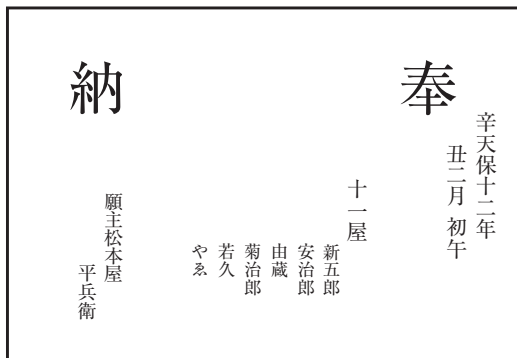


図2 絵馬「神馬図」の裏面の墨書

奉

辛天保十二年
丑二月初午

十一屋

新五郎
安治郎
由蔵
菊治郎
若久
やゑ

納

願主松本屋
平兵衛

願主として名が記される「松本屋平兵衛」は、「松本屋」の屋号を掲げ、千住四丁目で荒物屋や酒店を営んだ織畑家の人であると思われます。酒店「松本屋」は紙屋大久保家の南隣に店を構えており、両家は隣家同士でもありました。また、六名が列記される「十一屋」は、本紙六六二号でも取り上げた紙漉碑（地漉紙問屋の株仲間により天保十四年（一八四三）建立）にも「十一屋安右衛門」と屋号が刻まれる地漉紙問屋か、それに連なる家の人と推察されます。地漉紙問屋、木屋下村家伝来の「地漉紙問屋再興記録」（嘉永四年）、「地漉紙問屋冥加永願書」（安政六年）の記述によれば、十一屋は紙屋と同じく千住四丁目で商いをしており、両家は同業・同区域の家同士でした。

本作が掲げられていた屋敷稲荷の所有者である紙屋大久保家の名は記されていませんが、こうした絵馬は縁戚や近所など、何らかの関係を有する家や人物から奉納される場合もあり、この絵馬も隣近所である松本屋平兵衛が主体となって制作され、そこに十一屋の一家が共同奉納者となって、紙屋大久保家の屋敷稲荷に奉納されたものと推測されます。

■松本文測の記録に残る松本屋からの絵馬依頼 そして本作については、作者の松本文測の資料からもその背景を探ることが可能です。

文測は、日々の出来事や絵画の注文を細かに記録して残していますが、その一つである『註文簿』（天保三〜十年／当館寄託）には、本作の願主である千住四丁目の松本屋から、天保三年（一八三二）から少なくとも三年間にかけて、複数の神馬絵馬額の注文を受けていたことが記録されています。

記録に残る松本屋からの最初の注文は天保三年十二月二十三日で、「馬之図額三枚内 墨絵一 彩色二枚 四丁目松本屋」とあります。本作裏面の記述を参考にすれば、これは翌年の初午に向けた注文であると推察され、大久保家に奉納された絵馬も、記録には残っていませんが恐らくは天保十一年十二月頃に注文された可能性が考えられます。

また、天保四年正月前後には「馬之額二枚 地墨絵」、同六年八月二日に「馬之額三枚 各サイシキ」、同年九月八日に「馬之額 六枚内 スミ画 四サイシキ二」、同年九月二十八日に「神馬額一サイシキ」と、三年間に水墨画・彩色画の神馬絵馬額を合わせて十六点を文測に依頼しており、本作を合わせれば少なくとも十七点が松本屋からの依頼で制作されていたことがわかります。

松本屋がこれほど立て続けに神馬絵馬額を文測に依頼していた具体的な理由は定かではありませんが、本作とあわせ、この記録は、松本屋自身が主体

となり、天保三〜十二年前後にかけて文測の絵馬を十七か所以上の場所に奉納する作業が行われていたことを物語っています。その全てに十一屋も協力したのか、あるいは紙屋大久保家の屋敷稲荷に奉納するに際してのみ十一屋が関わったのかは未詳ですが、松本屋依頼による文測の絵馬は現段階においては他に現存が確認されておらず、本作はこうした松本屋による絵馬奉納と、文測自身の絵馬制作の足跡を物語る貴重な一点であると言えます。

■谷文晁からの継承を物語る一点としての「神馬図」そして本作は、文測が師である文晁の図像を忠実に学び、作品に活かした実例でもあります。

本作と図像を同じくする文晁の絵馬作品に、栃木県野木町所在の野木神社に奉納された「黒馬繫馬図絵馬」（文政十二年）や、浅草寺奉納の「神馬図」（天保二年）があります。片足を上げた繫馬図は絵馬の図像として一般的ではありませんが、特に「黒馬繫馬図絵馬」と本作「神馬図」は、馬の形態や顔の表情、たてがみや尻尾の毛の流れ、筋肉の隆起の表現までが明確に一致しており、白馬・黒馬の違いこそあるものの文測が文晁の図像を忠実に引き写したことが見てとれます。

文測が絵師として蓄積した粉本群（模本・下絵類／当館寄託）の中には、文晁の図を写したであろう「黒馬繫馬図絵馬」と同図様の模本（天保六年作、

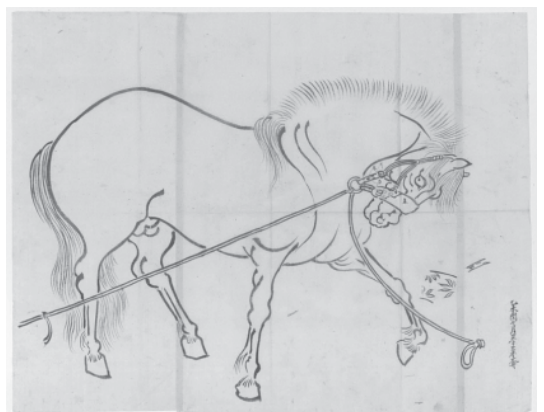


図3 松本文測「神馬図」模本

図3）が確認される他、東京大学東洋文化研究所が作成している文晁一門の粉本データベースを参照すれば二世谷文一も同様の模本（文政十二年作）を残していることがわかり、文晁の繫馬図の図像は一門の中で学習・継承されていたことが窺えます。文測はその学習を活かし、松本屋からの絵馬の依頼にあたって文晁からの図像を継承して制作を行ったのでしよう。

地域の絵師として活躍した文測ですが、作品の現存例は極めて僅かです。大久保家伝来の絵馬「神馬図」は、その貴重な一点であると共に、地域における絵馬制作、そして谷派絵師文測の文晁からの学習といった多様な側面を物語る、重要な資料と言えるのです。

（博物館学芸員 小林優）



清亮寺 天保4(1833)年の本堂と、文化財の扁額がある山門

文化遺産を伝える史跡①

清亮寺の境内

多田文夫

■墨蹟と伝説の名刹 日ノ出町にある清亮寺は槍掛けの松伝説や、名筆家で画家だった中村不折ゆかりの寺として知られています。今回から多くの文化遺産を伝える寺社や旧家をご紹介します。初回は日ノ出町の名刹、清亮寺の御寺坊をご紹介します。

足立の新田開発が一つの頂点に達した江戸時代はじめ元和五年(一六一九)、千住に隣接する弥五郎新田(現在の足立区

日ノ出町や足立と周辺)の寺院として建立されました。

本堂は天保四年(一八三三)の建立で、その後の安政大地震や関東大震災も耐え抜き、一部の改修を経ながら、現在も落ち着いた姿を見ることが出来ます。中村不折揮毫の扁額「久榮山」(足立区登録文化財)が掲げられている山門は昭和十年(一九三五)の再建です。

■水戸街道と槍掛けの松 水戸街道は幕府の道中奉行が管轄する脇往還の一つで



す。常陸(現、茨城県)と房総方面(現千葉県)の大名が利用する主要な街道でした。

もっとも重要な大名は御三家の一つ水戸徳川家(三六万石)です。水戸家は定期的に国許と江戸を往復する参勤交代を行わず江戸に常駐する定府大名(じょうふだいみょう)でした。常に將軍の許にあることから「副將軍」という通称になったとされます。ちなみに参勤交代とは異なりますが水戸藩主は何度か国許と江戸を往復しました。

ところで清亮寺は水戸藩主の徳川光圀の行列が差し掛かった際に、槍を立てかけた見事な松があったという「槍掛け」伝説の舞台です。かつての名松ですが清亮寺が伝来する関東大震災以前の古写真(右写真)を配した記念碑が境内に建立されており(右写真)、どなたも見学できます。写真右側に水戸街道も写っており往時をしのぶことができます。(郷土博物館学芸員)

美術誌「國華」一冊まるごと足立 特輯 千住・足立の文化遺産

■伝統を誇る美術雑誌 美術の大家、岡倉天心(一八六三〜一九一三)らが、明治三十二年(一八九九)に創刊、美術品を「國の精華」とし優れた論文と美しい図版で紹介する日本、東洋美術の研究誌です。その掲載作品は国宝や重要文化財が常連で、美術界の重鎮たちで構成される委員会が編集する権威ある雑誌です。そこに五月二〇日刊行の『國華』第一五三一号が「特輯 千住・足立の文化遺産」と題し、足立の美術品や古文書等が掲載されました。

■執筆の陣容 今回の執筆陣はこれまで郷土博物館の展覧会でご指導いただいている方々です。武蔵野美術大学の玉蟲敏子先生、国の東京文化財研究所の江村知子先生、昭和女子大学の鶴岡明美先生や川村学園女子大学の眞田尊光先生らが名を連ねています。

ぜひ定評ある美しい図版と、足立の美術と文化が詰まった一冊をお楽しみ下さい。定価は五〇〇円+税。約五〇頁。最寄り書店、ネットでの取り寄せになります。

また足立区立中央図書館(千住五丁目)でも閲覧可能です。

※特輯Ⅱ特集に同じ。

(郷土博物館)

お化け煙突60年③ 発電所の役割2

千住火力発電所は一九六三年に稼働を停止し、翌年に解体されました。発電所の終焉となった六〇年前を振り返ります。元千住火力発電所の職員格和宏典さんに文章をお寄せいただいています。

■千住火力の役割 千住火力は、東京電燈株式会社の子会社として建設されましたが、昭和十四年(一九三九)、自由経済体制から国家管理体制に移行し、日本発送電株式会社となり、戦後の電力再編成により、昭和二十六年(一九五二)に東京電力株式会社の子会社となりました。

発電所の構造設計は煙突も含め内藤多伸(ないとうたちゅう)氏が行ったと聞いています。大正一四年(一九二五)に工事が始まり一五年に一、二号、昭和四年に三号タービン・発電機が営業運転を開始しました。定格出力二万五千ワット×三台、七万五千ワットの発電所は、東京市の五分の一の電力を賄ったといえます。

ほかに二千五百ワットの所内用発電機がありましたが、これは営業用ではありません。発電開始から第二次世界大戦終結

頃までの電力需要は、水力発電で賄えたので千住火力は水力渇水期などで発電量が低下した時の補完的な予備火力発電所でした。

この時代は、水力が主力で火力が従だったことから、水主火従(すいしゅかじゅう)と呼ばれ、千住火力はそのような位置づけでしたから、巨大な煙突から煙の出るのは一年を通じて一、二か月くらいでした。このため、「まるでお化けのようだ↓お化け煙突だ」と周囲の住民から名づけられた名称でしたが、映画「煙突の見える場所」で煙突を見る方向によって一、四本に見えることが知らしめられたため、こちらが主流になったようです。

■他の火力発電所との関係 予備火力時代に入社した先輩が語ってくれました。「私は戦前の入社だけど、臨時雇いをやっててなかなか本採用にならなくて、数年間そのまんまだったよ。そして忙しい時だけこき使って、豊水期になると『ハイッ ご苦労さん、また忙しくなったら来てね』てな調子でいやらなっちゃったよ。社員はのんびりで、運転が始まると『あんときの〇〇はよく働いていたから呼び出せ』なんてね。すると臨時雇いは、次も呼び出

して貰えると一生懸命働くんサ。うまいやり方だよなあ。」

「だけどさ、臨時には仕事分の時間外手当がなかったんだ。だから、時間外のない社員にしちまおうとしたんだけど、稼ぎのいい古株の臨時雇などは高給取りだから辞退する人が続出したんだよ。」

戦後の復興期や昭和二九年(一九五四)の神武景気頃からの高度経済成長期の電力需要に対応するため新鋭火力の建設ラッシュとなりましたが、その新鋭火力が稼働するまでの需要対応のため、千住火力は常備火力へと変身し、孤軍奮闘していきました。

先輩社員は、「労働基準法なんてあったんかなあ、大げさに言えば二四時間ぶつ通しで働いたよ。」

「新鋭火力が稼働したときにゃ、

負けるもんか！てな気持ちだったよ。」と。新鋭火力と互角に位置づけられた所員の気概を語ってくれました。対等な位置づけでした。

そして、中堅職員が東京都・千葉県・神奈川県東部の東京湾岸の火力建設所へ異動となり活躍しました。この頃から火力が主で水力が従の火主水従となりました。

しかし、新鋭火力が次々稼働すると効率の悪い旧火力は見向きもされなくなり、三〇年代になると「廃止」の声がささやかれるようになりお役御免の日が近づいてきたのです。(続く)

昭和	西暦	発電所名	所在地(現地名)
31	1956	新東京火力発電所	東京都江東区豊洲
32	1957	千葉火力発電所	千葉市中央区
34	1959	品川火力発電所	品川区東品川
35	1960	横須賀火力発電所	横須賀市久里浜
36	1961	川崎火力発電所	川崎市川崎区
37	1962	横浜火力発電所	横浜市鶴見区
38	1963	五井火力発電所	市原市五井海岸
42	1967	姉ヶ崎火力発電所	市原市姉ヶ崎海岸
45	1970	南横浜火力発電所	横浜市磯子区
46	1971	鹿島火力発電所	茨城県神栖市
46	1971	大井火力発電所	品川区東品川
49	1974	袖ヶ浦火力発電所	袖ヶ浦市中袖

昭和30年代から40年代に稼働を始めた東京電力管内の火力発電所 ※建設や運転の準備等があるため、職員は稼働年前に早くから配置されている。『東京電力三十年史』より作成